ゆかしく年を重ねる雅びのままに

小馬　徹

神奈川大学の団体としての面白さや可能性は、大都市の総合大学であって、全国各地から様々な資質や経歴と多彩な文化・社会的な背景をもった学生が集まってくるところにある。同様に、本学外国語学部に勤めることの楽しさは――基本科目（かつての一般教養科目）の担当部局でもあるがゆえに――専門を異にする多数の先生方と交流して共に働き、時に思いがけず天恵にも似た触発を受けることの幸いの内にある。それは、人（他者）と出会って自ら日々新たになるという、生きることの喜びの秘密にも直に繋がっている。

古石井先生は、そうした敬愛すべき同僚、いわば「驚くべき他者」であり続けて下さった。私は、百名に近い外国語学部の教員の内では、まだまだ「新参者」の部類。先生とは、専攻分野も、所属部会も、また年代も違う。それゆえ、学窓を去られるに際して言葉の花束を捧げるには、恐らく、最も似つかわしくない者の一人だろう。ただ、変わらぬ敬愛の念を表し、賜った御厚誼に対して感謝を捧げる「資格」はあると思っている。何よりも、決して忘

れることのできない、一つのかけがえのない学恩のゆえに。

＊

社会人類学徒（または社会人・類学者）でありながら、まるで世間に疎い私が古石井先生の存在を知ったのは、（十余年前に）転勤してきて数年後のことである。それは、先年亡くなられた佐野正巳先生が言いだされ、私が纏め役になって、人文学研究所の共同研究班「笑いのコスモロジー」グループを立ち上げた際だった。

佐野先生が数えあげられた班員候補の中に、古石井先生の御名前があった。どんな方かと聞くと、佐野先生は一息入れてから、優しい目で、徐に「ふぅーん、お嬢さんでね……」と答えを返された――他学科や他部会の先生方に馴染みが薄かった私は、所属、専攻、学風、著作などを尋ねた積もりだったのだが。幼い時からの恵まれた育ち、屈託のない明朗さや一途さ。恐らくそれが含意だっただろうが、深く心に残る、唐突な言葉だった。

初めてお会いして、何よりも印象深かったのは、張りと艶のある晴れやかなソプラノの声の稀にみる美しさ、わけても英語の発音の端麗な響きだった。発話は抑揚に富み、レチタティーボを聞くような律動と華やかさがあって、内面の潔い強さ、逡巡のなさを同時に感じさせた。人間の声は、単に言語のメディアなのではない。連動する諸器官の協調によって身体の内奥から発せられるがゆえに、肉声は図らずも内面の陰影を伝える「内部性」を帯びる。古石井先生の謦咳に接して、俄かに佐野先生の言葉がはっきりと脳裏に蘇ってきた。

声の「内部性」は人を裏切らない。人文学研究所の叢書の一冊として編まれた『笑いのコスモロジー』（勁草書

房、１９９９年）所収の論文「漫画の魅力――〈笑い〉の構造分析」を執筆された折りの、古岩井先生の研究への傾倒ぶりには心底感嘆させられた。サトウ・サンペイと長谷川町子の四コマ漫画を数多く引用するために著作権者と目下鋭意交渉中だが、場合によっては、校了まで多少の時間的な猶予を貰いたい。ただし、必要経費は一切自分が負担する。そのような申し出を受けた。

結局、先方の事情で『サザエさん』からの引用は叶わなかったものの、先生の論稿は豊富な具体例に裏付けられた論理が明快で、素晴らしく充実したものになった。『笑いのコスモロジー』は、幾度も新聞雑誌に取り上げられて書評された。そして、執筆者の一人が日本笑い学会に講演を依頼され、また別の一人が外国のラジオ局のインタヴューを受け、古岩井先生ご自身は、求められて『神奈川大学評論』に新たな論文を発表された。同書が広く注目されたのは、自己負担の大きさを端から度外視して、有名な四コマ漫画をふんだんに引用して論及された、先生の妥協のない学問的な志の賜物であった。

＊

ただし、先に「決して忘れることのできない、一つの学恩」と書いたのは、右の事ではない。やがて、日高昭二先生が人文学研究所共同研究班「物語研究」を編成され、古岩井先生と共に、私も五名の班員の一人として参加することになった。日高先生が間もなく学部長に選ばれると、古岩井先生が代わって後任の研究代表になられた。

この時も、古岩井先生の共同研究への献身的な取り組みには、頭が下がる思いだった。私が「決して忘れること

のできない、一つの学恩」を蒙ったのは、その折に先生が企画された、或る研究会でのことである。

その研究会のために、わざわざ池上嘉彦先生が神奈川大学まで出向いて、言語学・記号論の立場から物語の構造分析の理論を論じて下さった。その事自体、私には驚愕すべきことだった。誰もが畏敬して止まないこの一代の碩学を、こんな風にこともなげに呼んでこれる古岩井先生。改めて「驚くべき他者」を見る思いがした――一体、どんな「お嬢さん」なのだろう。

ただし、その研究会の日取りと時間帯は、誠に間の悪いものだった。日高先生（学部長）と鈴木陽一先生（人文学研究所長）は、それぞれ何かの会議出席のために、報告が始まって10分も経たずに退席された。非常勤の藤本勝一先生はご欠席。私には、30分後に（独立）大学院歴史民俗資料学研究科の演習が控えていた。しかし、こうなればもう中座は難しかった。人を頼んで、教室で待つ院生たちに事情を伝え、時々様子を見に来るように指示した。池上先生は、素人である私の質問や疑問に実に懇切に応対してくださった。その内にとうとう覚悟を決めた私は、いつしか議論にのめり込んでいった。結局、演習はお流れになる。でも、院生たちは優しかった。二人の議論を逐次追いながら、自分たちもその展開を自分たちなりに論じあって楽しんだ、と言ってくれたのだった。（なお以下に、この件で長々と私事に触れる不作法を、ここで前もってお詫びしておきたい）。

実は、池上先生もとうに失念されていたに違いないのだが、私は遙かな以前、まだ博士課程の学生だった頃に、先生から大きな学恩を受けたことがあった。それは、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（ＡＡ研）の、或る年の夏期言語特別研修に関係する。その年の対象言語はペルシャ語とスワヒリ語で、社会人類学徒としてアフリカ研究を志していた私は、後者を学ぶ絶好の機会を得た。講師は、ＡＡ研の守野庸雄先生と、わざわざザン

ジバルから招聘したワジール先生（タンザニア憲法のスワヒリ語訳者）。朝から夕方まで続く連日4週間の講習は、いかにも猛烈（いや殺人的）なものだった。なにしろ3日間で一通り文法を仕上げ、4日目からは原文で小説を読み進めるという具合だから、のっけからバタバタ落伍者が出た。そして終了式では、私がスワヒリ語で謝辞を述べることになった。

暫くして、守野先生から嬉しそうな声で電話が掛かってきた。その謝辞（とその日本語の訳文）が載ったＡＡ研の『通信』をご覧になった池上嘉彦先生が、守野先生にこう語られたというのだ――「この人がスワヒリ語の研究を続けてくれれば楽しみだね」。それは、池上先生の声を借りた、守野先生ご自身の要望だった。しかしながら、（東アフリカの共通語である）スワヒリ語はフィールドで土地の言葉を習得するための単なる手段として学ぶのだと端から宣言していた私は、心を鬼にして、朴念仁を装って通したのだった。

でも、一面識もない池上先生の思いもかけない言葉を伝え聞いて、身震いするほど嬉しかった。当時言語相対論に関心があった私は、サピア・ウォーフの理論や人類学、さらにはＡ・ダンデスらのフォークロアの理論などにも造詣の深い池上先生に深く私淑していた。その後、私が遠方に赴任するまでの三、四年間、私的に研究会を続けて下さった守野先生の御援助と共に、池上先生の一言が、まだ海の者とも山の者ともつかなかった私には、どんなに大きな心の拠り所となったことか。お二人の学恩は、無論、お返しする術もない。

古岩井先生は、研究会ではひっそりと聴き役に回って、その池上先生と差しで議論する時間をたっぷりと私に与えて下さったのである。大学院の演習を絶えず気に掛けてジリジリしながら、ついにそれを放棄した臨界点で、私は（教師としての）自我が音を立てて崩壊するような放心を感じていた。その自己崩壊の感覚は、高揚した議論の

法悦を恍惚にまで止揚させた。そして、神奈川大学に赴任して以来最も忘れがたい経験となった。

*

私に、思いがけず、奇跡のような一時を与えて下さった古岩井先生。だが、暫くして、私はまた一驚させられた。あれほど熱心に「物語研究」班の研究活動に打ち込んでいらっしゃったのに、ある日突然、「物語研究」代表を私に譲り渡すと、一方的に宣言されたのだから。

なんでも、突然、早期退職を思いたたれた由。神奈川大学に在職できる七十歳の年限まで、余すところ数年。それからでは遅過ぎる。まだ元気な内に、若い頃から続けてきたピアノ演奏と、最近上達が著しいゴルフに打ち込みたい。あの晴朗なレチタティーボで、滔々とそう述べられた。

当時、私は人類学者たちの学会の庶務を担当していて、常の年にも増して忙しかった——いや、まったく心を亡くしていた。だが、古岩井先生がそう宣言された以上、なす術もなく、それで全て決まりだった。「先生、ジャよろしくね！」。古岩井先生は、颯爽と一陣の風のように去っていかれた。一朝不乱に学問に傾倒し、一夕人生を達観して潔く退く。そういうことであったろうか。

先生の後姿を見送って、暫くポカンとしていた私だったが、やがて深い吐息と共に、思わず言葉が口をついて漏れた——「カッコいいなぁ！」。

誰かの退場をもって一つの時代を終わらせるのは、確かに、去りゆく方に言葉の花束を捧げる者の常套の筆法でもあるだろう。しかしながら、この小文を綴っていて、今更のように、一つの感懐を禁じえない。例えば、古岩井先生のような「お嬢さん」を、あるいは議論に熱中して演習を別の時間にやり直すような私を柔軟に受けとめて容れてくれた、古き良き神大。そこここにまだ豊かな襞を蓄えていた、懐の深い、かつての神大を懐かしく思わずにはいられない。

早期退職を突然思い立たれたという古岩井先生のお心も、恐らく私などが余所目に「カッコいいなぁ！」と感心して済ませることができない、微妙な感慨に彩られていたのであろう。昨今、改めてそう思ってみる。

*

古岩井先生ご自身が、退職を目前にして、外国語科目教育協議会のニューズレター『複眼』に寄稿された、「Greetings」という短文がある。先生は、ウェールズで偶々会われて親交が始まった米国婦人の3冊の詩集の中から、ご自分の心の琴線に触れた詩句を選んでその一文の棹尾に添え、それをもって、さほど長くない文章を結ばれている。

野蛮な社会人・類学者たる私は、古岩井先生に捧げるこの小文を結ぶに当たって、その秀麗な英文の詩句をウラ

ル・アルタイの言語のそのまた方言へと、おずおずと拙く引き移してみる。そして、先生のお心を今一度なぞり直して、あの時へと思いを遠く致してみるばかりである。

Greetings

Upon awakining this morning,
I gazed through my windowpanes,
And from under heavy eyelids,
I viewed the moon's remains.
That bright, thin bowl cradled a wish:
'May today be kind to thie.'
One lone star 'flickered' her farewell,
as she blinked back at me.
Last night is gone forever,
And tomorrow morn' I'll see,
That same star has travelled to the west,
With her moon, as company.

挨拶の言の葉

この朝(あした)を起きぬけて
重たい瞼のこちら側から
ガラス窓の向こう側へと
明け残る月を見はるかす
あの輝く薄碗(うすまり)は望みの揺籃(ゆりかご)——
「この一日が汝に親しからんことを」
ひとつ星がきらりと光り
瞬きを返して暇を告げる
夕べは永久(とわ)に去り
明日の朝に私は見よう
あの星がまた月に伴われて
西の方(かた)へ渡ってゆくのを

I am filled with new day's joy,
Born from nature's sweet surprise,
Each morning when I raise my lids,
From awakening, sleepy eyes,
And may you too, find God's caress
In Joys, one may behold,
And pleasure in his blessings,
While gracefully growing old.
(*Little Book of Poems* by Martha M. Fuller)

図らざる自然(てん)の恵みに
新たな日は歓喜で満たされる
起きぬけに眠い目を開く
朝(あした)が一つ来るそのたびに
あなたもまた神の手に気づかれんことを
遭(あ)うこともあらん悦(よろこ)びのうちに
神の嘉(よみ)したまわん愉(たの)しみのうちに
ゆかしく年を重ねる雅びのままに